

おはようございます。それでは通告に従いまして一般質問をさせていただきます。

私は、“教育新時代に向かう「磐田の教育」の新興 について” 伺います。

教育行政が新しい時代に入って行く中で、磐田市は教育の目標として、平成 26 年 3 月 “「磐田の教育」道しるべ” を策定し、平成 27 年 8 月には「磐田市教育大綱」を制定しました。その「教育大綱」には “いのちを培う・誇りを培う・礼節を培う・敬愛を培う・感謝を培う・こころざしを培う” と崇高な理念が示されています。日本社会全体が熾烈な競争の中で闘ってきた結果、いつしか日本の伝統的な倫理・文化の概念が薄れてきてしまったことの反省が、この “道しるべ” “大綱” には込められていると感ずるのであります。そして打ち出された “学府一体校整備構想” と併せ、これからの時代にふさわしい教育を推進していくことの方向性が示されたと思料いたしました。

ならばここは、その実現に向かって、教育そのものの質も、中身も、変革していく気構えが今必要であろうと考え、以下、「磐田の教育」の新興について伺います。

(1) 社会環境悪化と深刻な青少年問題 について伺います。

①倫理観・道徳観の貧困から生ずる諸問題 についてです。

オバマ大統領の広島演説の中で倫理・道徳を意味する “moral” の言葉が 3 回使われています。その一節に「原子核の分裂を可能にした科学の進化と同様、moral (倫理・道徳) の進化も求められている。」というくだりがありました。私はこうした科学分野だけでなく、経済活動・社会活動に於いても同様に、本来両輪であるべき倫理観・道徳観が横におかれて薄められてしまった結果、金銭至上主義や学力偏重風土が蔓延して、知力と倫理力のアンバランスが起こす嘆かわしい大人の不幸事が多発する社会となっています。

非正規雇用・格差社会拡大もそうした社会の産物ではありますが、こうした社会の負の影響が、教育現場で、子どもたちにどのように影響しているのか、どんな形で表れているのか状況を伺います。

②社会・家庭環境悪化と不登校状況 についてです。

0 歳から 14 歳の年少人口が減少していく中で、不登校児童生徒数は増加しています。文科省学校基本調査にみる小中学校の不登校児童生徒数は、平成 24 年度計 112,689 人、25 年度 119,617 人、26 年度 122,897 人となっています。

市政報告書にみる磐田市の状況にても、平成 24 年度計 192 人、25 年度 192 人、26 年度 205 人となり増加傾向です。生徒数 1000 人に対しての数値を全国・県・磐田市で比較してみますと、平成 26 年度で全国 12.1 人、静岡県 13.3 人、磐田市 14.6 人となり、家庭環境悪化の影響もあるであろうと思料いたします。参考までに少し補足させていただきますと、高校生の不登校状況は、全国で 53,156 人、この内中途退学に至った生徒は 15,065 人となり、また、不登校の要因としては、コミュニケーション力不足とか家庭的問題からの “情緒的不安” と “無気力” が半数を超える大きな要因となっているのは全国的に同傾向ですが、当市に於いては “情緒的不安” が特に大きな要因になっていると伺っています。社会環境の悪化があつて、親が経済・精神面で不安定となり、親子が向き合う時間が少なくなつて、生きる力を育む土台づくりが欠けているのではないかと推測するのであります。

学校ではこうした事情の改善・支援のために家庭訪問や個別学習等対応して下さっておりますが、市唯一の支援機関である「磐田市教育支援センター〔通称あすなろ〕」では、「あすはヒノキになろう〈翌

檜)」と頑張っていると伺っていますが、どのような対応をして復帰を目指しているのか、効果はどうか、また、課題としてはどのようなことがあるのかについて伺います。

③ひきこもり者支援対応と予防的対応 についてです。

先日発表された「2016年度版子ども・若もの白書」によれば、と言っても、2010年度に実施した「ひきこもり実態調査値」ですが、15歳～39歳のひきこもりとなっている推計値は69.6万人となっています。厚労省の推計値は25.5万人ですが、この若もの白書では、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」という準ひきこもり者46万人も含まれています。

「静岡県ひきこもり支援センター」で伺った推計値は、県内7,000人、磐田市300人とのことですが、厚労省数値がベースですので、白書レベルの数値で推定すれば、もっと大きな数値が想定されます。磐田市推定300人ということであっても、実際に支援センターに相談に来られた磐田市在住の方は平成25年度16人、26年度31人、27年度26人のみとのこととあります。ひきこもりが如何にデリケートな問題であるのか想像できます。

本年3月に報告された2015年の全国ひきこもり家族会連合会の調査結果によれば、平均年齢34.1歳、ひきこもり期間平均10.8年間、ご家族の平均年齢62.8歳となっています。この数値を知っただけでもご家族の悲惨さは想像できますが、そうした家庭状況を実際に見る、あるいはそうした家族が手をつなぎ活動しているNPO団体の話を聞けば聞くほど、社会全体でもっと理解し支援を考えていかななくてはと思うのであります。

ひきこもりの原因は、成績の低下、受験の失敗、いじめ、病気、職場での不適合、両親の不仲等様々であって、どこの家庭でも起こりうる指導を受けましたが、今回私の注目する点は、ひきこもりの初発年齢は12歳～20歳代が生じやすく、ひきこもり者の多くは不登校を経験しているということです。とすれば、

不登校の予防的対応としての支援教育が重要であり、それは、ひきこもりを予防することにつながるということになります。当局のひきこもり者に対する支援の状況について伺います。また、不登校の予防的取り組みについて見解を伺います。

(2) 今後の磐田市の教育新興策について 伺います。

①に入る前に意見を補足させていただきますが、今後の超少子高齢化・人口減少そして経済動向を考慮した時、社会環境が今より明るく良い方に好転するイメージにはならないと考えるのが一般的かと思えます。とすれば、将来の社会を担う青少年に、厳しい時代を生き抜く強い精神力・体力を鍛えると同時に、求める幸せの基準を、モノやお金や立身出世ではない真の心の豊かさを求める自分・社会に変えていく変革が必要と考えます。

男女共同参画社会が叫ばれて何年になりますでしょうか。家庭科学習とか学校でそうした教育を受けた世代の男子が、ようやく子育てに参加し、ワークライフバランスとか育休とか実践するようになりましたが、まだまだ「男は仕事」「女は家庭」という概念から抜け出しきれない層があります。人の心を変革するような教育は時間がかかります。時間はかかりますが教育しかありません。以下思いつく教育事例案を提起させていただきます。

① 自然体験活動の充実・施設の整備 についてです。

不登校の復帰支援対応事例を参考にしたいと考え、不登校生の為の専門学校を東京を中心に全国に展開している「師友塾」の例をインターネットで覗いて見ますと、そこでは「元気が正義だ」が合い言葉になっていて、心のエネルギーにあふれた人が元気な人であり、感じる力が強く、考える力が深く、そして人

を愛する力のある人だと言っています。そして、元気を取り戻すために必要なことは「自信」を持たせることだとして、豊富なイベントを実施し、様々な発見や成長のきっかけにしているとのことでもあります。

そこで、コミュニケーション力をつけ、自立心を育てるべく「自信」を持たせる教育として、豊富なイベント、自然体験活動が有効だと思料しますし、学府一体校となれば、異年齢でのイベントも容易になることから、リーダーを育てる教育もやりやすくなるかと思料しますので次の2事項について提起します。

ア) 旧豊岡東小学校を野外活動センターとして活用 についてです。

かつては社会教育として屋外でのキャンプ等盛んに行われていたのですが、現在磐田市ではやれるところがなく、ボーイスカウトの人たち位しか行われていません。浜松市には県立の「観音山少年自然の家」以外に「浜松市立青少年の家」があり、キャンプ場として「かわな野外活動センター」等ある中で、このほど約2年間閉鎖されていた「龍山青少年旅行村」が「龍山秘密村」として運営再開されました。磐田市としても、閉校となった豊岡東小学校をキャンプ等が出来る野外活動センターに転換したらいかかかと思料します。周辺には、敷地川が流れ、獅子ヶ鼻公園・トレッキングコースがあります。豊岡東交流センターも近くであり協働も可能であります。野外活動のメッカになる要素がそろっていると思料します。当局の見解を伺います。

イ) 兎山公園を「磐田版 森のようちえん」として活用 について

今、自然の中で屋外体験活動を通じて心身を育む「森のようちえん」が各地に広がりを見せています。子どもの主体性を重視し、友だちとの遊びや自然体験を通じて、自分で考え、行動できるようにする幼児教育であります。

兎山公園の周辺は、鎌田神明宮・医王寺があつて緑いっぱいであり、加えて、4年後にはJR新駅が出来て公共交通の便もこの上なく良くなるという特徴を持っています。2時間ぐらい自然体験をして、あるいはお弁当持ちで来て楽しんで帰るとする拠点とすることで市内の幼稚園、こども園が利用する「磐田版森のようちえん」としたいものです。雨風をしのいで休憩でき、お弁当が食べられるぐらいの施設程度だけでも実施できます。

こうした検討について、当局の見解を伺います。

② 「心の教育・徳育」重視 についてです。

この4月、世界で最も貧しい大統領と言われたウルグアイの元大統領ホセ・ムヒカさんが来日し、日本の若ものたちと対話して、衝撃的な感動と忠告をされていきました。日本に着いて最初の一言は、「日本の若ものに聞きたい。お年寄りよりも幸せですか」でした。記者会見では「富に縛られず、どうすれば幸せになれるか考えよう」と呼びかけました。2012年のリオ会議のスピーチのように数々の名言を残されました。なぜこれほどまでに感動を呼ぶのかを考えてみますと、日本人が見失ってしまったことについて直言されたことにあると思料しました。ムヒカさんの言葉を借りて、「豊かさとは何か」「人生で大切なことは何か」を今一度学び直すことが我々に必要ではないかと思料したものであります。それは「磐田市教育大綱」に沿い、人格陶冶の精神で、人間教育をやることに通じることと思うのです。

モノの豊かさを求めバブルに向かった日本の社会の中で、そして、その崩壊後の失われた20年といわれた中で企業の生き残りをかけての賃下げ・リストラ・非正規化等があつて、知育・徳育・体育の内の“徳育”が置き去りにされてしまったかのように感じるのであります。心のひ弱さの克服、多彩な働き方の体験的学び、「もったいない」「足るを知る」等の日本の文化も少年期に学ばせたいものと考えますにわか勉強の域での記述で恐縮ですが、遺伝子研究の第一人者である村上和雄筑波大名誉教授は、人間の持つ60兆もの細胞にある遺伝子情報の内、使われている遺伝子は5%のみだけということで、その遺伝

子のスイッチをオン・オフに切り替えるのは、感謝・感動・喜び・祈り・笑いなどの自分の心であり意思だということです。うれしい、わくわく、感動、感謝といった陽気な心が体に良い遺伝子のスイッチをオンにするとのことです。ここに心を豊かにする教育のヒントがあると思ったのであります。こうした“心の教育・徳育”についての考え方・これからの方向について当局はどのように考えているのかお伺いいたします。

③ 運営は地域や社会の力を借り連携して対応 についてであります。

前述した「野外活動センター」や「森のようちえん」を活用しての“自然体験活動の教育”や“心の教育”のような幼年・少年期の時に行いたい大切な教育は、従来は学校教育からは離れたところの社会や家庭に求められた分野の教育であったかと思えます。しかし家庭の教育力が弱まってしまったと思料する現在では、新時代を迎える磐田市9年間の義務教育の中に組み入れてほしいと考えるものです。そうした教育事業の運営については、このたびの中学校部活の外部委託へ向かう流れのように、NPO法人等と連携する方向で考えれば運営推進する方法が見えてくると思料します。先生方の忙しさについては社会は理解していますし、地域社会にはそうしたことを引き受けてくださるような人たち、NPO法人等は近くに居ると思っています。当局の見解を伺います。

以上です。よろしくお願い致します。